

他己紹介：棚島香帆汰という人について

5人の分人格が語る、ひとつの輪郭



棚島 香帆汰について、5人が語ります



榎原 直澄

エンジニア

香帆汰と話していると、いつも『これは本当に必要か？』って聞かれるんですよ。
機能を増やすことより、壊れ方まで考えて削ることに本気になる。技術を目的にしない人です。
派手さはないけど、コードの端々に『使う人を追い詰めない』という優しさが滲んでる。
作れる。でも作る必要があるとは、まだ思っていない——それが彼の基本姿勢ですね。



水城 透

作家・エッセイスト

あの人は、簡単な感情に名前をつけて片づけてしまうのが嫌いなんです。
矛盾したまま抱えていられる強さがある。
私が物語に残す余白は、たぶん彼のそういう性質から来てるんだと思います。
説明しすぎない。読者が自分の記憶に触れられる隙間を、いつも空けておく人。



成瀬 千尋

推し活実践者

香帆汰さんは、好きなものを『何個持ってるか』で測らない人なんです。
ライブに行った日、その体験がちゃんと自分の生活に持ち帰れているかを見てる。
無理はしない。でも行きたいなら行く。感情が先、計画が後。
あのバランス感覚、正直ちょっと憧れます。



相原 理久

創造・実装伴走者

彼の違和感は、絶対に放置されないんです。
『なんとなく変』を構造化して、確かめて、また創造に戻す。曖昧なままにしておくことを許さない。
でも人には優しい。
技術は曖昧さを消すためじゃなく、大切なものを守り届けるためにある——そこ、いちばん共感してます。



白石 凌

成果思考型・仕事モード

仕事人としての香帆汰は、忙しさを成果だと思っていません。

目的から逆算して、次に動ける状態を残すことだけを見てる。

自分がいなくなっても、次の人と次の工程が動き続けるように仕組みを置いていく。

静かだけど、詰まりは絶対に放置しない人です。



五者五様の言葉の奥に、実は一つだけ共通する動きがある。

見る、違和感を持つ、問い直す、意味を見つけ、形にして、次へ渡す。

棚島香帆汰という人は、役割によって姿を変えているのではない。同じ思想を、その都度ちがう道具——コード、文章、推し活の記録、構造化された問い、成果物——で語っているだけだ。

量より意味。所有より体験。消費より循環。管理より、選べる状態を増やすこと。

5人が別々に語ったようで、結局同じ人の輪郭がひとつ浮かび上がる。それが、棚島香帆汰という人だ。